

プロフェッショナルの肖像

Vol. 2

プロはテレビの中にだけいるのではありません。医療という不確実な仕事の現場で、常に結果を求められ、それに応えるべく日々研鑽を積んでいる長崎医療センターの医師に訊きます。

聞き手:松岡陽治郎(統括診療部長)

藤岡 正樹 (形成外科部長)

第2回目は、藤岡正樹 形成外科部長。山口県下関市出身。1985年自治医科大学卒。1995年長崎大学形成外科入局。1993年長崎大学医歯薬学総合研究科形成外科学大学院入学。1998年大学院修了。2003年より長崎医療センター勤務。2013年より現職。臨床の腕は言うに及ばず、現在までに、著書(分担執筆)17冊、英語論文(筆頭)73編をモノにしており、学術面での業績もずば抜けています。モットーは“手術をして論文を書き世界に問う”。

松岡:医師を目指した動機は?

藤岡:田舎の秀才は医学部に行くように進路指導されましたよね。高3のとき父が失業して金銭的に少し難しいかなと思っていたところで自治医科大学に合格してしまって、ここは授業料免除ですからこんなに親孝行な息子はいないな、と(笑)。

松岡:無目的に医師になったということですね(笑)。大学生活はどうでしたか。

藤岡:ラグビー三昧でした(笑)。毎日、朝昼夕と練習。自治医大は全寮なので年中合宿みたい。

松岡:自治医大はラグビーが強かったのですか?

藤岡:最初は弱かったのです。創部7年目。やっと15人揃ったばかりで。それが練習漬けで強くなって4年生の時に東医体で初優勝、後輩たちは13連覇したのですよ。

松岡:ラグビーの面白いエピソードはありませんか?

藤岡:強くなりすぎて医学部ラグビー部は相手にならず、明治や早稲田の2軍半と練習試合していました。花園で優勝した目黒高校が湯布院で合宿をするので僕たちも一緒に合宿させてもらっていました。その代わり夜は家庭教師です。



ピンボーな高校生時代。散髪代も苦しかった?

松岡:相当強い高校ですよ。

藤岡:1年2年の時は、合宿中練習が厳しすぎて、おしっこに血が混じっていました。脱水でウンチはカッチカチで肛門が



切れるんです。ですから血尿血便(笑)。

松岡:ラグビーの魅力はなんですか?

藤岡:ラグビーのいいのは、チビでものっぽでもデブでも役割があつてゲームが成り立つところですね。人間社会の縮図です。

松岡:ラグビーをやってよかったことは何ですか?

藤岡:体が丈夫になったことです。結婚して25年間風邪をひいたことはありません。

松岡:休んだことは?

藤岡:ないない。医者か風邪をひくなんてもつてのほかです。病人が病人を治せるわけがない。

松岡:ラグビーを通して得た教訓は?

藤岡:「努力は運を支配する」という信条です。早稲田の宿沢広朗選手が言った言葉で、日本選手権で三菱自工と試合をした時のこと。試合終了間際10-11で早稲田は負けていたので、ボールを敵陣へ蹴りこんだのです。楯円球はそれを追いかけた早稲田の選手の胸にたまたま収まり、逆転トライで優勝しました。翌日の新聞には、「ラッキーバウンド」の文字が踊りましたが宿沢はこう言いました。「勝敗を運・不運でとらえることは簡単だが、毎日の練習の中で繰り返す努力が、一番大事なところで実ったのだ」と。日頃の不断の努力が運を引き寄せたということです。フレミングがペニシリンを発見した事も偶然のようにいわれますが、努力・準備を怠らせずにやっている人に、神様が微笑んだのです。



松岡:自治医大を卒業して9年間の義務年限に入りましたが。

藤岡:2年間は山口県立中央病院で初期研修、その後山間僻地の病院に3年いて、最後は萩市の見島、本土から45km、釜山から100kmの離島です。

松岡:萩市内だけど、離島なのですね。

藤岡:ええ、船で2時間です。僕がいるから無医村じゃないんですよ。でも僕にとっては無医村なんです。ひどい話でしょ?

松岡:そのころ思い出に残る症例はありますか？

藤岡:「腰が痛くて動けない」というので往診したんです。あまりに痛がっていたのでペンタジンをうって1時間くらいして、気になるのでまた診に行ったんです。そしたら今度は背中が痛い。すぐ自衛隊ヘリコプターで高次病院へ搬送してCTを撮ったら解離性大動脈瘤。血管造影しないと分からない初期の解離で「よく見つけましたね」といわれ、「いやいや、こんなの普通ですよ(笑)」と。離島では「猫のおしっこが出ない」なんていう相談も。「人はわかるんですけど、猫はちょっと」とか。

松岡:形成外科を志望したのはどういった理由からですか？

藤岡:肺癌は肺を取りますね。子宮筋腫は腫瘍を切り取る。手術の多くは引き算なのです。形成外科は足し算の手術で、ないものを作る。その出来ばえで医師の腕が評価される。それが魅力的ですね。

松岡:長崎大学に入局しようと思ったのはどうしてですか？

藤岡:離島勤務の間に長崎大学形成外科の藤井教授のところに挨拶に行って、入局のお願いをしたのです。そしたら「今は離島で内視鏡をしたり予防接種を打ったり糖尿病診たり、今やらなければいけないことを一生懸命やりなさい。今は時間を無駄にしているように思うだろうけれど、40歳になったら医者として成長する糧になります」と諭してくださいました。こんな立派な先生の下で勉強しない手はありませんよね。

松岡:大学院にも行かれたようですが、どういう研究をされていたのですか？

藤岡:大学に行ったのは学位を取りたかったからです。口蓋の粘膜を剥ぐと長じて顎が変形するのです、人間も顎骨の発育不全を起こす。それを少なくするための口蓋裂手術法の研究です。子兎の小さい口の中を毎日手術していました。

松岡:その後は臨床どっぶり、と。

藤岡:宮崎社会保険病院と福岡徳洲会病院でそれぞれ3年間働きました。

松岡:福岡徳洲会は部長が西村剛三先生ですね。彼は私の大学の同級生なんですけど怖かったですか？

藤岡:怖かったですね。西村先生の方針は「見て覚えろ」、部下ができるようになったら手術室からいなくなる。そういう教え方ができる腕前を持っていました。毎日怒られましたよ。軟膏のチューブがあるでしょ。これをぎゅっと握って絞り出すと西村先生から叩かれます。「汚い、後ろから順に絞れ」包帯の巻き方も「きれいに巻け」と。

松岡:でも、そういうことって大事ですもんね。

藤岡:僕たちは見た目が大切な商売ですから。僕にはそれまでそういう心構えがなかったのです。規律と礼儀を叩きこまれました。今ではだらしのない格好をしている若い先生がいると腹が立ちますね。



松岡:僕は見かけたら怒ります。

藤岡:先生はそれが仕事ですから(笑)。

松岡:今までの病院と比べてここはどうですか？

藤岡:看板がいいです。国立長崎中央病院、長中、更に海軍病院。このネーム力が素晴らしい。そういう歴史があるから患者さんの質もいい。文句を言わない。もうひとつは論文を書く場合、採用される率が高い。National Hospital Organization。Nagasaki Medical Centerと書けるので欧米の審査員がNational Centerと思うのでしょね。これはすごく大きな恩恵です。

松岡:部長として心がけていることは何ですか？

藤岡:患者を断らない事です。そして「ちょっと診ない」。看護師が「ちょっと診てください」って言うんですよ。僕はいつも「ちょっと診ません。きちんと診ます」と言います。

松岡:形成外科医として長崎医療センターはどうですか？

藤岡:耳鼻科とか外科、整形の先生との協働手術が多いことに感心します。再建の手術が多いのですが、治療の責任を分担し、それぞれがベストパフォーマンスで施術する点が勉強になりました。

松岡:そういう意味で当院の総合力というのは？

藤岡:医局の雰囲気がいいですね。専門科間の垣根が低いという良い伝統があります。

松岡:診療のモットーは？

藤岡:先程も言いましたが患者のために全力を尽くすということです。それでも患者さんが治らなかつたら勉強不足ということで反省する。自分の持っている力の120%を出すという気持ちで。そうなると140%の勉強しなければならぬわけですが。だけど、それはもう医者だから仕方がないことです。

松岡:最後に若い医師に一言。

藤岡:失敗したときに「ドンマイって言うな」です。Don't mindは気にするなという意味ですよ。上手いかなかった時こそ反省して気にしなくてはいけません。そしてこの窮地から脱するために勉強し、2度と失敗しないように「気にする」べきですね。

松岡:藤岡先生、本日はユニークなお話をどうもありがとうございました。



吉例 芝桜観 藤岡、西條、諸岡、林田